皆で話し合う　「マルコによる福音書　〔8〕」　a

3章1～6節、

手の萎えた人をいやす　〔マタイ12：9－14、ルカ6：6－11〕

1イエスはまた会堂にお入りになった。そこに片手の萎えた人がいた。2人々はイエスを訴えようと思って、安息日にこの人の病気をいやされるかどうか、注目していた。3イエスは手の萎えた人に、「真ん中に立ちなさい」と言われた。4そして人々にこう云われた。「安息日に律法で許されているのは善を行う事か、悪を行う事か。命を救うことか、殺すことか。」彼らは黙っていた。5そこで、イエスは怒って人々を見回し、彼らのかたくななな心を悲しみながら、その人に、「手を伸ばしなさい」と云われた。伸ばすと、手は元どおりになった。6ファリサイ派の人々は出て行き、早速、ヘロデ派の人々と一緒に、どのようにしてイエスを殺そうかと相談し始めた。

再び安息日がめぐってきました。イエスは、自分に対する敵意が溢れている会堂に行かれます。人々がイエスを如何に見ようが、イエスを安息日の主と認めない人々が会堂に満ちていようと、**イエスは、主であり**、その事を会堂でお示しになるのです。私たちも主の居られる所に赴かねばなりません。主日に頭として主が居られ、その兄弟姉妹たちと礼拝を共にする所に赴く事は勿論、週日には「イエスが既に来られているこの世界」で、イエスと共に祈り、イエスと共に　神様の憐れみ」を世界に示さねばなりません。そこには片手の萎えた人がいるのです。キリストの臨在、キリストの栄光をあざ笑うかのように、その会堂には悲惨な不具という現実がありました。現在の世界の現実はどうでしょうか？　キリストの栄光、キリストの平和が、キリストの臨在を指し示しているでしょうか。いや、命を失わせようと苛まれている人たちがいるのです。一例を挙げましょう。先日久しぶりに東京教区のごく親しい友人がマルコ教会に来られ、東京教区エルサレム委員会が出版された岡真里姉の、『パレスチナの平和と　私たち」の役割」という講演輯を頂きました。これを読む毎日、慄然としながら、イスラエルとその国の周囲のパレスチナ人との争いの真相と、踏みにじられている平和、人間の心の醜さ、恐ろしさにおののいています。何よりも、イスラエルの人々は未だに　聖絶」という言葉を信じているのではないか、という疑心に駆られています。約２０年前に幾度も、畑野さんに白状するが、私は、旧約の神が《聖絶せよ》という言葉を使われたのが，理解できない」と言われた司祭様がおられましたが、私は今も、現在のイスラエル人たちがその言葉を字義通りに受け取っているのではないか、とこの本を読んで疑いました。勿論イスラエルとパレスチナの問題のみではなく、世界には今も、キリストの平和の光をもってしても、照らす事の出来ない暗黒が満ちています。**でもキリストの平和、平安は、その暗黒を打ち破るのです**。あたかも、あらゆる人間の理性らしきものが作り上げた見掛けだけの制度、見かけだけの良心の枠を超え、サタンの誘惑に従い、自分たちだけの繁栄とむさぼりと言う虚像・偶像を求めて生きている世界の中で、イエスのように、「善を行うのがよいのか、悪がよいか。命を救う事か、それとも救わない事によって殺す事か」と問い続ける。イエスが怒られ、悲しまれたように、いい加減な、日本を含む諸先進国に対して、聖霊の力と勇気によって抗議の声をあげる事か。私たちの

勇気は今何処に向かえばよいのでしょう。直ぐに武器を用いてでも、自分の欲望を広げようとする人間の心の弱さに向かってでしょうか。それには宣教によって闘う」。それとも、戦争はしない、武器は用いない、持たないと決めた、日本の現憲法を死守する事に向かうのでしょうか。 暴力を用いない政治的実践によって戦う事をおろそかにしない）

実際、イエスを殺しかねない敵意と反目の中でイエスはなぜ怒られたのでしょう。律法では、安息日に病気を治してはいけない、と言っているのではないのです。生命の危険がある時は治療してもよい、となっていた。片手が萎えていても生存には差し支えありません。だからイエスはもう一日治療を伸ばしてもよかったのです」、にも拘わらず、イエスは片手の萎えた人を会堂の真ん中に呼び出されます。何故なら、その人個人にとっては、生きるとは愛され癒されることであり、一刻を争う事なのです。イエスの愛は、もし片手の萎えた人をそのままで放っておく時、その人を殺している事と同じなのです。愛は一刻一刻を大切にします。イエスは今日成すべき事を明日には延ばされないのです。人間を大切にされる、と言う事が神様の願われる所なのです。イエスのこの怒り、この悲しみは、昔の予言者たちによって示された主の怒りと悲しみに通じるものです。たとえばアモスは、「聞け、貧しい者たちを踏みつけ、地の悩む者たちを絶やす者よ。・・・見よ、その日が来る。主の日はあなたがたにとって一体何になる。それは闇であって、光ではない。・・・その日は飢饉がある。実に主のみ言葉を聴くことの出来ない飢饉がある。）又、ホセアには

わたしは誠実を喜ぶが、いけにえは喜ばない。全焼のいけにえより、むしろ神を知る事を喜ぶ」と言われたのに、神の真意を悟らない民たちばかりであった。現在でも神様の真意を悟らない国民達はいるのです。だから、その時の神の怒りと悲しみと同質な怒りを、イエスは持たれたのです。現在はどうでしょうか。アメリカのおごり、日本の追随、イスラエルの暴虐。先進諸国のエゴ。難民、飢民。棄民の氾濫。

イエスはその人に言われた。「その手を伸ばしなさい」。その人が手を伸ばすと、その手は元通りになった。イエスは怒りの中においても、手の萎えた人にみ言葉を与えられる。手を伸ばそうとしなかったら、その手は元のままだったろう。彼は伸ばせる筈の無い手を伸ばした。唯イエスのお言葉だから。それが「信じる」と言う行為である。手は元通りになった。所が、この事実を見て殺意を決定的にしたものたちがあった。（ヘロデ党の者たちというのはどのような人たちであるのかはハッキリしない。ファリサイ派の人たちと相容れぬ、安息日にも礼拝に出てこない一派と言う説もあり、ヘロデ王家から好意的に扱われていた「エッセネ派」を指すという説もあるが、明確ではない）・

ここで既に十字架の影がさし始める。聖霊によりイエスの中に到来している 神の支配」は律法をイエスの内側から満たし成就しているが、律法を自分の義を立てる為の手がかりにしようとする者たちには、もはや律法を遵守する事を救いの条件とされないイエスを、自分たちの立場を根本から否定する者として憎み、殺そうとする。彼らは神の恩恵の支配に反抗し、自分が主人であることに固執して神を憎むのである。ここに人間性の罪深さがあらわになる。生まれながらの人間性は本性的に神の霊の事態に逆らうのである。

このようにユダヤ教との論争、対立、決裂を描くことによって(２：1～３＊6)、マルコはイエスの中に到来している「神の支配」が、人間から出るものとまったく別のものであることを告げ知らせる。それは唯神の恩恵により、神の霊によって上より与えられるものである。それを受けるのはただ信仰だけである。